

中野香織

「ファッション歳時記」

113

ミス・フランスの青年と、
最年少の女性首相

フランス映画「MISS ミス・フランスになりたい!」を観ました。夢に男女は関係ない。少年のころからの夢であるミス・フランスを目指して何が悪い? 目標に向かって闘いながら自分や周囲の殻を破っていく美青年の物語が、現代フランスのリアルな事情を背景に、エモーショナルに描かれます。

主人公を演じるアレクサンドル・ヴェテールは、ジェンダーにとらわれず活躍しているモデルでもあります。ミスコンの舞台に立った時の妖しくも洗練された美しさときたら、ミスコン勝者は女性であるべきという前提が、軽くふっとびます。さらに印象に残るのは他の出場者で、

予選を勝ち抜いていくのは、アフリカ系、イスラム系、インド系といった個性的な美女。20世紀の後半に私たちが「パリジェンヌ」と認識していたカトリーヌ・ドヌーヴみたいなイメージを踏襲する白人女優は少数派です。ヨーロッパは移民をどんどん受け入れてきた結果、白人よりも非白人が増えつつあります。その結果、宗教衝突による社会問題が起きていますが、映画のミスコン舞台の上は、そうした激変するフランス社会の構造を、平和的に縮図にしたものにも見えました。

変わりゆく社会の縮図という絵柄から連想が飛んだのは、フィンランドの議会です。フランス映画とフィンランドの政治、まったく違う世界ではありますが、ここにも新しい社会を予兆する現象が見られます。

閣僚たちの中央で微笑むロンゲヘアの女性、サンナ・マリネ(35)はフィンランド社民党のメンバーにして、世界最年少の首相になった人。ちなみに、社民党と共に連立政権を組む4党すべてのリーダーが女性で、そのうち3人が30代です。

マリネ首相は昨秋、ある雑誌に掲載された写真で一大論争を巻き起こしました



「MISS ミス・フランスになりたい!」
2月下旬、シネスイッチ銀座ほか全国公開
©2020 ZAZI FILMS - CHAPKA FILMS - FRANCE 2 CINEMA - MARVELOUS PRODUCTIONS

た。素肌の上に黒いジャケットとネックレストという装いに、「不適切」「品がない」と批判が殺到。しかし、それ以上に、「ファビュラス」という賛辞が寄せられたのです。女性政治家だけに外見や装いのチェックが入るのは、たしかに性差別ではありませんね。ロシアのプーチン大統領は上半身裸でスポーツをする写真を公表しているのに、品位を問われたりはしません。



なかの かおり

1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、昭和女子大学客員教授、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「イノベーター」で読むアパレル全史(日本実業出版社)、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史(吉川弘文館)ほか多数。

首相を支持するのは、性差別のないヒューマニズムを重んじる人々で、こうした人々は、モダンレフェティストと呼ばれます。マルクス主義に根差すのではない、人間中心主義の21世紀的な左翼のことで、30代の女性党首たちの活躍の背後にもこうした考え方があります。マリネ首相の両親は同性同士のパートナー。彼女自身は長年の男性パートナーとの間に娘を生んでから結婚しています。このような家族のありかたも今日的ですが。

時代は確実に次へと進んでいます。旧来の障壁にとらわれない個々人がその人らしく活躍するイメージが拡散されることで共感の風が吹き、現実社会を刷新する力となっていくでしょう。風の源となるのは、いつだって、ひとりの勇氣。まずは素肌にジャケットから真似てみようか(違う)。